

## 第4章 焼津市の歴史文化の特徴

### 1 地域ごとの概要

第2章冒頭で述べたように、焼津市の地理的環境などを総合的に勘案すると、高草山周辺域、瀬戸川流域、旧大井川本流域、現大井川左岸域の4地域に区分することができ、それぞれに特徴的な歴史文化が残っています。

#### (1) 高草山周辺域（行政区分：東益津地区）

朝比奈川・瀬戸川以北の市域北部で、高草山山地に起因する歴史文化が形成されています。高草山の支脈が延びる小浜<sup>おばま</sup>や浜当目など海浜部も含みます。山腹には古墳群が残り、山麓には歴史ある寺社や史跡が点在します。古代以来、日本坂や大崩海岸は駿府（静岡市）への街道であり、戦国時代には要所として山城が築られました。江戸時代以降、山間部では商品作物が栽培され、花沢地区に代表される山村集落が形成されるなど、海と山の生活の中で独自の歴史文化が育まれました。

指定文化財 ※表記のないものは市指定	有形文化財	建造物	法華寺の仁王門、林叟院の経蔵、林叟院の鐘楼、林叟院の宝篋印塔、香集寺の石燈籠、那閉神社の常夜灯、若宮八幡宮の石橋、原田家住宅（国登録）
		美術工芸品	木造聖観音立像（県指定）、弘徳院の絵馬、香集寺の絵馬、大日堂の吉祥天像、大日堂の不動明王像、宝積寺の地藏菩薩像、勢岩寺の弘法大師像、猪之谷神社の六鈴鏡、若宮八幡宮棟札、坂本貞次・駒井勝盛連署状、徳川家康朱印状
	民俗文化財	無形民俗文化財	山の神祭
	記念物	遺跡（史跡）	井伊直孝産湯の井
		動物、植物、地質鉱物（天然記念物）	猪之谷神社のナギノキ
	伝統的建造物群		焼津市花沢（国選定）
未指定文化財	有形文化財	建造物	法華寺本堂、法華寺の道標、法華寺の乳観音堂、風口坂の道標、大崩の道標、若宮八幡宮本殿、旗掛石、那閉神社本殿、林叟院本堂・開山堂・禅堂・衆寮・庫裡、那閉神社末社青木神社、神明宮、諏訪八幡神社、那閉神社鳥居、宝積寺西国三十三観音石仏、勢岩寺の庚申塔、吉津集落墓地中世墓群
		美術工芸品	鳴沢不動尊、閻魔大王坐像、機織地藏、寛沢1号墳出土銀象嵌円頭太刀把頭
	民俗文化財	無形民俗文化財	虚空蔵山のダルマ市
	記念物	遺跡（史跡）	花沢城跡、石脇城跡、方ノ上城跡、船舶無線電信発祥地記念塔、仙人ヶ岳、日本坂峠、旧街道（江戸期）、石脇隧道、浅間神社
		名勝地（名勝）	大崩海岸
		動物、植物、地質鉱物（天然記念物）	キスミレ、エイザンスミレ、コシノコバイモ、枕状溶岩、タケノコ岩、当目石

表 4-1 高草山周辺域の指定等文化財

(2) 瀬戸川流域（行政区分：焼津・大村・豊田・小川地区）

瀬戸川の南で、焼津港、小川港の海浜部から、藤枝市境までを含む地域です。中世以来、「小河湊」「焼津湊」と呼ばれ、今日まで焼津漁業をけん引してきた浜通りを中心として海とのつながりが深く、現在の海岸から離れた場所にも“塩津”など海に関連する地名が残ります。日本武尊伝承地である北の御旅所や御沓脱跡などがあり、焼津神社の荒祭りが行われる地区が含まれます。戦国から江戸時代には徳川家、田中藩などと密接に関係した地域です。

指定文化財 ※表記のないものは市指定	有形文化財	建造物	海蔵寺本尊厨子、海蔵寺本堂、大井神社本殿、永豊寺の山門
		美術工芸品	太刀 銘「備前長船長義」（県指定）、太刀 銘「備州長船住成家」（県指定）、太刀 銘「景次」（県指定）、海蔵寺の絵馬、「一遍上人縁起絵」断簡、光心寺の麒麟の笙、海蔵寺の厨子 附 厨子内納入品 一、内厨子 一、守り本尊、貞善院の鯛口、普門寺の半鐘、大身槍 銘長吉作、今川氏真朱印状、獵方申合定法之事、漁方規定取極之事、海蔵寺の御戸帳、小深田型石製垂れ飾り
	無形文化財		焼津鯉節製造技術、弓道具製作技術、焼津笠製作技術
	民俗文化財	無形民俗文化財	焼津神社獅子木遣り（県指定）、焼津神社の獅子木遣りと神ころがし（国記録選択）
	記念物	動物、植物、地質鉱物（天然記念物）	臥竜のマツ、旭伝院のマツ
未指定文化財	有形文化財	建造物	浜通り服部家、青峰山勝景院本堂、堀川周辺の蔵群、教念寺本堂、貞善院総門、焼津神社本殿、青木神社本殿、旭伝院山門、海蔵寺芭蕉句碑、焼津神社水産翁石碑、船玉浦神社
		美術工芸品	常照寺魚藍観音像、不動院不動明王像、与惣次釈迦堂釈迦像、海蔵寺奉納弁財船模型、保福島大井神社戦争絵馬、佐藤道外「明治大正焼津街並往来絵図」、小泉八雲関係資料、東洋丸（浜通り船元）北原家文書、高橋雲亭作品、益頭駿南作品、徴用船関係資料、模擬原爆破片、第五福竜丸関係資料、蔵珠院糸掛け観音、八雲地藏
	無形文化財		焼津節（民謡）
	民俗文化財	有形民俗文化財	カツオ・マグロ漁関係資料（焼津漁業資料館・福一なんばん記念館）、焼津漁業絵図（鈴木兼平画）、魚河岸シャツ、鯉縞シャツ、石津箕
		無形民俗文化財	焼津節、焼津の伝統食（黒はんぺん、なまり節、へそ、なると）、焼津神社の荒祭り、大覚寺地藏盆ヒャクハツタイ
	記念物	遺跡（史跡）	普門寺庭園（源義経ゆかりの庭）、御沓脱跡、札ノ辻の庚申塚、北の御旅所、越後島山田越後守夫妻墓所、南の御旅所、小路、波除堤防モニュメント、安泰寺、小泉八雲風詠之碑、小泉八雲滞在の家跡、エンカ屋敷跡、波除けの堰用の柱、護信寺（北の弁天さん）
		動物、植物、地質鉱物（天然記念物）	瀬戸川流域のエノキ、鳴子のマツ
	文化的景観		浜通り
	伝統的建造物群		浜通り
	その他		浜言葉、屋号、字名

表 4-2 瀬戸川流域の指定等文化財

(3) 旧大井川本流域（行政区分：大富・和田・港地区）

かつて大井川の本流が流れていた地域で、大井川への信仰と関係する「大井神社」が集中しています。また、波（浪）除地蔵、川除地蔵など海、川への祈りを示す未指定文化財も点在しています。新田開発を示す字名が多く、江戸時代以来、水稲稲作が盛んだった土地です。この地域には川の水を防ぐ堤や輪中の痕跡も残っており、次項の現大井川左岸域と同様の生活文化が認められます。和田浜ではかつて地引網漁が盛んでした。和田浜は「袖ヶ浦」とも呼ばれ、富士山と駿河湾を望む風光明媚な地として、中世の歌人が書き残しています。また、浜に沿って防風林の松林が続いており、一部は江戸時代に植林されたもので、現在は「松の小径」と呼ばれ、親しまれています。

指定文化財 ※表記のないものは市指定	有形文化財	建造物	成道寺の宝篋印塔
		美術工芸品	絹本墨画淡彩芦葉達磨図（重文）、成道寺の百萬塔  成道寺の百萬塔
未指定文化財	有形文化財	建造物	田尻村・田尻北漁業権境石、大井八幡宮本殿、成道寺山門、一色の寄子明神
		美術工芸品	波（浪）除地蔵、川除地蔵、学校地蔵尊、下小田の花火地蔵、洞福寺子返しの絵馬、中根大井浅間神社宮参り絵馬、祢宜島地蔵堂延命地蔵菩薩と役行者像、伝太田道灌の馬の轡、荻野堂の馬頭観音、大住の耳葉師像、「飯塚兵左衛門一代記」、北新田の北向き薬師堂薬師如来像  学校地蔵尊
	民俗文化財	無形民俗文化財	三葉神社の宮座形態、本中根四十九の餅、田尻北の地引網操業
	記念物	遺跡（史跡）	伊丹氏（武田の水軍大将）の屋敷跡と墓、アグリガン島海難事故供養塔
名勝地（名勝）		和田浜（袖ヶ浦）、松の小径	

表 4-3 旧大井川本流域の指定等文化財

(4) 現大井川左岸域（行政区分：大井川地区）

現在の大井川左岸に広がる平野部で、<sup>さんきょせん</sup>散居村集落が残ることでも知られています。輪中跡や舟形屋敷、三角屋敷などは大井川の水害との戦いを物語る遺跡です。重要無形民俗文化財の「藤守の田遊び」は、平安期から続くといわれる、稲作の豊穰を願って奉納される民俗芸能です。このほか、街道筋だったことを示す旧相良街道跡（田沼街道）や六十六部廻国巡礼資料が多く残る地域です（図 4-3）。昭和 45 年（1970）まで運行していた軽便鉄道跡など交通関係の遺跡も残ります。

指定文化財 ※表記のないものは市指定	有形文化財	美術工芸品	長徳寺格天井の絵、日本全勝千万年之図、不動明王立像、鰐口、扁額「静富山」、掛川城主山内一豊の判物、今川義元判物
	民俗文化財	有形民俗文化財	横山九郎右衛門の六十六部廻国関係資料、谷澤兵三郎の六十六部廻国関係資料、法月三郎兵衛の六十六部廻国関係資料  六十六部廻国関係資料（笈）
		無形民俗文化財	藤守の田遊び（重文）
	記念物	遺跡（史跡）	旧相良街道跡（田沼街道）、円永坊跡、福翁山大満寺跡、百ヶ間地田跡、静浜村外二ヶ村組合立静浜高等小学校跡、徳川家康公床机据え跡  徳川家康公床机据え跡
未指定文化財	有形文化財	建造物	高德寺山門、長徳寺本尊厨子
		美術工芸品	相川川除地藏、いぼとり地藏、源正行銘十文字槍、宗高権現徳川家康肖像画、徳川家下賜茶道具類
	無形文化財	大井川西小学校校歌、志太天神製作技術、上新田ダルマ製作技術	
	民俗文化財	有形民俗文化財	藤守の田遊びの面、宗高凧、上新田ダルマ
		無形民俗文化財	トーロン、吉永八幡宮の大名行列と鹿島踊り、上小杉八幡宮の神相撲と流鎧馬
	記念物	遺跡（史跡）	舟形屋敷、輪中跡、藤守の水門、軽便鉄道跡、養鰻池の石積、西尾藩小杉陣屋跡、岩本館跡、下瀬越え跡、湧水地  軽便鉄道橋台跡
		動物、植物、地質鉱物（天然記念物）	則心寺のクスノキ
文化的景観		散居村集落	

表 4-4 現大井川左岸域の指定等文化財

### (5) 各地域に共通する歴史文化

市北部の高草山周辺域から南部の現大井川下流域までの4つの地域には、各地域内でも平地や海浜部などの自然環境に即して、様々な文化財が残っています。一方で、市内全体に共通して認められる歴史文化もあります。

日本武尊の伝承地や、徳川家康に関する古文書等の資料、史跡、伝説などは、海や山といった自然環境に関係なく、市内全体に確認できます。市内の多くの場所からは富士山を眺めることができ、今は途絶えたり消滅した祭祀や史跡がほとんどですが、富士山への信仰も市内に広がっています。現大井川左岸域で触れた六十六部廻国巡礼資料のほかにも、廻国行者とも伝わる川中島八兵衛かわなかじまはちべえに関する史跡や、その他の廻国に関する文化財が全域に見られることも、特徴のひとつといえます。



図 4-1 日本武尊伝承の残る場所



**1** 武田軍が花沢城を攻めた際に、諸堂が焼失したと伝わる。焼失したのは、武田軍が撤退した時とも。  
**2** 花沢城主大原（小原）資良が武運長久のため建立。  
**3** 坂本貞次、駒井勝盛等が武運祈願のため建立と伝わる。  
**4** ※地図参照  
**5** 大原（小原）資良の家臣岩崎主馬が武運長久のため建立。  
**6** 徳川家康の家臣であった原川氏が坂郷の原川村（掛川市）から勧請した。  
**7** ※地図参照  
**8** 今川家臣山田新左衛門が建立。  
**9** 江戸幕府の重臣井伊直孝が再建。  
**10** ※地図参照  
**11** ※地図参照  
**12** 天正7年（1579）徳川と武田の戦いで諸堂が焼失した。  
**13** 式内社。武田家臣須藤左門を祀る青木神社の祠が境内にある。  
**14** 徳川家康が戦の折、身を隠したという逸話が残る。  
**15** 武田軍の落人がこの地に住み着いて祀った神社。  
**16** 徳川家康が鷹狩りの際に立ち寄った。  
**17** 元々、徳一色城（田中城／藤枝市）内にあったが、武田家領国の際に、現在地に移る。後には田中城主本多家より厚く信仰される。本多家は三河以来の徳川家臣で「婆叟」を徳川家に譲ったとの逸話がある。  
**18** 徳川家康が鷹狩りの際に立ち寄り、満水の大井川を渡るために祈願した。  
**19** ※地図参照  
**20** 小川城主長谷川正宣が建立。小川城落城の際に宝物を隠したとの逸話あり。  
**21** 開創の哉翁宗也が今川家重臣朝比奈家の出身で武將としても活躍した。  
**22** 徳川家康拜領の品が伝わる（江戸時代）。  
**23** 小川城主長谷川元長が熊野三社から勧請したと伝わる。  
**24** ※地図参照  
**25** 開闢の哉翁宗也が今川家重臣朝比奈家の出身で武將としても活躍した。  
**26** ※地図参照  
**27** 花沢城落城に際し、この付近で追撃戦があり、その際、犠牲になった武將を祀ったもの。  
**28** ※地図参照  
**29** 今川、武田の水軍をたばねた伊丹氏の位牌がある。伊丹氏は、花沢城の戦いにも参陣した。  
**30** 武田家臣秋山虎繁が開基となった。  
**31** 徳川家康が愛馬の譽を殿治屋宗九郎に直させた際に、馬をつないだ松。現在の松は2代目。  
**32** 徳川家臣伊奈備前守忠次より、社領を寄進された。  
**33** ※地図参照  
**34** 今川、武田の戦い後、武田の支配下となり、武田家臣によって寺領を能満寺（吉田町）に寄進される。  
**35** 武田家から社領の寄進あり。また、徳川家康が鷹狩りの際に祈願した。  
**36** 天正年間、徳川家康が大井川通行の際に祈願した。  
**37** 武田勝頼や徳川家康の信願を受け代官になった池谷清右衛門が再建に貢献したと伝わる。  
**38** 元亀3年（1572）、武田信玄が大井川を渡る照明とするために燃やされたと伝わる。  
**39** 今川、徳川から帰依を受けた。  
**40** 今川義元より税免除等を認められる書状や徳川家臣伊奈備前守忠次の黒印状が残る。  
**41** ※地図参照  
**42** 焼津の漁船は徳川家康より特別に八丁櫓の使用を認められる。

**1** 武田軍が花沢城を攻めた際に、諸堂が焼失したと伝わる。焼失したのは、武田軍が撤退した時とも。  
**2** 花沢城主大原（小原）資良が武運長久のため建立。  
**3** 坂本貞次、駒井勝盛等が武運祈願のため建立と伝わる。  
**4** ※地図参照  
**5** 大原（小原）資良の家臣岩崎主馬が武運長久のため建立。  
**6** 徳川家康の家臣であった原川氏が坂郷の原川村（掛川市）から勧請した。  
**7** ※地図参照  
**8** 今川家臣山田新左衛門が建立。  
**9** 江戸幕府の重臣井伊直孝が再建。  
**10** ※地図参照  
**11** ※地図参照  
**12** 天正7年（1579）徳川と武田の戦いで諸堂が焼失した。  
**13** 式内社。武田家臣須藤左門を祀る青木神社の祠が境内にある。  
**14** 徳川家康が戦の折、身を隠したという逸話が残る。  
**15** 武田軍の落人がこの地に住み着いて祀った神社。  
**16** 徳川家康が鷹狩りの際に立ち寄った。  
**17** 元々、徳一色城（田中城／藤枝市）内にあったが、武田家領国の際に、現在地に移る。後には田中城主本多家より厚く信仰される。本多家は三河以来の徳川家臣で「婆叟」を徳川家に譲ったとの逸話がある。  
**18** 徳川家康が鷹狩りの際に立ち寄り、満水の大井川を渡るために祈願した。  
**19** ※地図参照  
**20** 小川城主長谷川正宣が建立。小川城落城の際に宝物を隠したとの逸話あり。  
**21** 開創の哉翁宗也が今川家重臣朝比奈家の出身で武將としても活躍した。  
**22** 徳川家康拜領の品が伝わる（江戸時代）。  
**23** 小川城主長谷川元長が熊野三社から勧請したと伝わる。  
**24** ※地図参照  
**25** 開闢の哉翁宗也が今川家重臣朝比奈家の出身で武將としても活躍した。  
**26** ※地図参照  
**27** 花沢城落城に際し、この付近で追撃戦があり、その際、犠牲になった武將を祀ったもの。  
**28** ※地図参照  
**29** 今川、武田の水軍をたばねた伊丹氏の位牌がある。伊丹氏は、花沢城の戦いにも参陣した。  
**30** 武田家臣秋山虎繁が開基となった。  
**31** 徳川家康が愛馬の譽を殿治屋宗九郎に直させた際に、馬をつないだ松。現在の松は2代目。  
**32** 徳川家臣伊奈備前守忠次より、社領を寄進された。  
**33** ※地図参照  
**34** 今川、武田の戦い後、武田の支配下となり、武田家臣によって寺領を能満寺（吉田町）に寄進される。  
**35** 武田家から社領の寄進あり。また、徳川家康が鷹狩りの際に祈願した。  
**36** 天正年間、徳川家康が大井川通行の際に祈願した。  
**37** 武田勝頼や徳川家康の信願を受け代官になった池谷清右衛門が再建に貢献したと伝わる。  
**38** 元亀3年（1572）、武田信玄が大井川を渡る照明とするために燃やされたと伝わる。  
**39** 今川、徳川から帰依を受けた。  
**40** 今川義元より税免除等を認められる書状や徳川家臣伊奈備前守忠次の黒印状が残る。  
**41** ※地図参照  
**42** 焼津の漁船は徳川家康より特別に八丁櫓の使用を認められる。

図4-2 戦国武將に関する文化財

## 市内の廻国行者関係位置図

- ★ 川中島八兵衛の碑 所在地
- ① 廻国供養塔／天保7年（1836）
- ② 廻国供養塔／享保9年（1724）
- ③ 廻国供養塔／寛延2年（1749）
- ④ 小柳津の三郎兵衛／寛延年間頃（1748～1750）
- ⑤ 廻国供養塔／寛延2年（1749）
- ⑥ 石津の五輪さん
- ⑦ 廻国行者の墓／天保7年（1836）
- ⑧ 源久さんの墓／江戸時代
- ⑨ 六部塚／宝暦6年（1756）
- ⑩ 釈迦堂の弥吉関係資料／天保～文久頃（1830～1861）
- ⑩-1 子安観音坐像（廻国供養塔）／天保10年（1839）
- ⑪ 方眼さん
- ⑫ 廻国供養塔／天明5年（1785）
- ⑬ 石原弁吉の墓／明治14年（1881）
- ⑭ 横山九郎右衛門・谷澤兵三郎・法月三郎兵衛の六十六部廻国関係資料／宝永6年～正徳2年（1709～1711）
- ⑭-1 廻国供養塔／宝永7年（1710）\*明治13年再建
- ⑮ 廻国供養塔／宝暦13年（1763）\*昭和期再建
- ⑯ 六部地藏／天保3年（1832）
- ⑰ 六部塚／昭和6年（1931）

- その他の廻国行者伝承
- ・高林の大師
  - ・萩の森
  - ・六新さん
  - ・丹波の助太郎



図 4-3 市内の廻国行者関係位置図

コラム：六十六部廻国巡礼関係文化財にみる焼津人の気質（図 4-3）

現大井川左岸域を中心に点在する六十六部廻国巡礼資料には、焼津出身の3人が巡礼の旅で使った笈おひや笠などが残り、焼津市有形民俗指定文化財となっています。このほか、他国から当地にたどり着き亡くなった巡礼者を手厚く祀った墓碑ほひや地蔵なども残されています。六十六部廻国者は、「六部」と呼ばれ流れ者扱いを受けることもあったようですが、巡礼者を祀るこれらは、焼津の人々が他者を受け入れる開放的な気質を持つことを物語る文化財ともいえます。旧大井川本流域以南に多く残る川中島八兵衛碑も紀伊出身の人物を祀ったもので、同じような意義を持っているかもしれません。

焼津市域には日本坂峠や大崩海岸沿いの旧街道、古代小河（川）駅、近世の旧相良街道跡（田沼街道）など陸路の要所であり、また海運の基地としての発展もあり、昔から人々の往来が多い土地柄だったことが、こうした文化財に反映されていると考えられます。

コラム：焼津水産翁～焼津漁業発展の功労者～

焼津水産翁とは、明治から大正の近代漁業黎明期に、焼津漁業の発展の基礎を築いた功労者で、下記の4名の人物それぞれを称えた尊称です。焼津神社には彼らの功績を顕彰するために、漁業関係者によって建立された石碑せきひがあります。

山口平右衛門やまぐちへいえもん（1837-1915）は初代の焼津漁業組合長となるなど、焼津漁業発展の基礎を築いた人物です。浜通りの人たちの暮らしを守る波除堤防の建設にも力を注ぎました。

服部安次郎はっとりやすじろう（1850-1941）は山口平右衛門とともに焼津町生産組合（のちの焼津信用金庫、現しずおか焼津信用金庫）を設立し、焼津漁業の発展に努めました。安次郎は港の必要性を訴え、築港のための資金調達などに奮闘しました。彼の働きが、後の焼津港築港計画の基礎となったといわれています。安次郎の生家である「浜通り服部家」は現在、屋号をとってゲストハウス「帆ほや」として生まれ変わり、歴史、文化とのふれあいや地域交流の場として活用されています。なお、焼津信用金庫は（生）（まるせい）と屋号で呼ばれ親しまれ、焼津の文化とともに歩んできた信用金庫です。

片山七兵衛かたやましちべえ（1858-1916）は魚問屋などを営み、漁船も所有する事業家として、焼津漁業の主力魚種であるカツオの習性について研究し、いち早く漁船の動力化に取り組みました。片山が動力船で成功をおさめたことにより、焼津では漁船の動力化が進み、新しい漁場の発見と漁獲量の増加へとつながりました。

村松善八むらまつぜんぱち（1852-1907）は焼津節といわれた鰹節の品質向上を目指し、高知県から鰹節製造教師こうちけんを招き、自宅を開放して鰹節伝習所はくらんかいを開設しました。以後の博覧会などで「焼津節」の品質が認められ、村松の確立した焼津の鰹節製造技術は、全国の鰹節の標準型として広く普及しました。



写真 4-1 焼津神社境内の水産翁の碑



## 2 焼津市の歴史文化の特徴

前節に記した高草山周辺域、瀬戸川下流域、旧大井川本流域、現大井川左岸域には様々な歴史文化が見られ、各地域内でも、海や平地などの自然環境に根ざした特徴的な歴史文化が培われてきました。また、地域をまたいで残る文化財もあります。それらを総合して、焼津市の歴史文化の特徴をまとめます。

### (1) 高草山周辺域を中心とした歴史文化の特徴

#### －焼津辺の旧街道－

東海道本線、東海道新幹線、東名高速道路が通る焼津市域は、古代から東西交通の要所でした。平安時代には小川地区に官営の駅が置かれ、市域北端の花沢地区を通る日本坂峠越えの街道は、万葉集にも詠まれた“焼津辺”の道ともいわれ、古代東海道とも推定されています。日本坂の街道は東海道が藤枝市宇津ノ谷へ移った後も重要な街道で、高草山山麓の旧道沿いには江戸時代の道標が残り、日本坂トンネルができるまで人々に長く利用されました。日本坂峠の街道に並行する海沿いの大崩の尾根道にも江戸期の道標があり、東西をつなぐ街道が通っていました。

#### －早雲出世城と戦国の激戦地－

戦国武将のさきがけといわれる伊勢新九郎盛時、俗にいう北条早雲は、今川家のお家騒動に伴い京から下向し、焼津の石脇城を拠点に小川城主長谷川正宣と連携し、今川氏親が家督を継ぐことを助けました。早雲はこの功績によって関東進出の足掛かりを得て、大大名たる後北条氏の基盤を築きます。早雲の出世は焼津から始まったともいわれ、石脇城は出世城といわれることがあります。なお、幼少の氏親がかくまわれた小川城跡の発掘では舶載



写真 4-2 北条早雲ゆかりの石脇城跡

陶磁や茶道具に関する資料などが見つかっており、当時の先進的な文化を取り入れていたことが判明しています。城主の長谷川正宣は小河湊も掌握し富を得て、「山西の有徳人」とも呼ばれました。続く長谷川元長は教養人として知られ、その子正長は三方ヶ原の戦いで戦死しますが、子孫は池波正太郎作「鬼平犯科帳」の主人公、長谷川平蔵（本名・宣以）へとつながっていきます。

焼津は今川氏の西の境界を示す「山西」（高草山の西の意）に位置し、常に今川氏の動向に影響を受けていました。天文5年（1536）、梅岳承芳（今川義元）と玄広恵探が家督を争った花倉（花蔵）の乱の際には、高草山山麓の方ノ上城で戦が行われました。元亀元年（1570）には武田信玄の駿河侵攻による、日本坂越えの街道の南を押さえる花沢城での武田、今川の激戦が知られています。

武田信玄の駿河侵攻後、武田軍が掌握していた焼津には、天正7年（1579）以降、徳川軍が進軍しました。武田方の持舟城（静岡市駿河区用宗）の支城である当目砦や青木の森で合戦が行われたことが記録に残ります。



図 4-4 焼津市の歴史文化の特徴

### －高草山山地の自然と恵み－

高草山山地は枕状溶岩の露頭が見られる火山岩性の山です。山地のなかで一番高いのは501 mの高草山ですが、低山ながら市内のどこからでも望むことができます。古墳時代の群集墳や歴史ある寺社が点在するなど、文化財の宝庫でもあります。江戸時代には楮やアブラギリ（毒荏の木）などの商品作物の栽培地でもあり、漁村を含む平坦地への燃料供給地でもあり、また当目石や三輪石（藤枝市域）といわれる石材の産地としても知られていました。明治時代以降は山裾でミカンが、中腹にかけては茶栽培が盛んになり、高草山からは茶畑越しに志太平野と駿河湾を望む景観が形成されました。

高草山山地のなかでも良好な歴史的景観を残すのが花沢地区です。花沢地区は江戸時代以来の山村集落で、地区内には古代東海道といわれる日本坂峠への街道が川と並行して通っています。屋敷地は街道の西側に集中し、江戸時代の建物配置を踏襲し、主屋を山側に置き、敷地中央に農作業のための庭を設け、平地を確保するため道路際から石垣を積んで、石垣の直上に農作業などで使われた附属屋を建てています。地区内には江戸時代の主屋や附属屋が散在的に残り、明治時代後半以降のミカンや茶の栽培、養蚕などの盛行とともに建物が増改築されてきました。特にミカン栽培は花沢を潤し、ミカン貯蔵や季節労働者の寝泊りの場所を確保するため、2棟の附属屋の2階をつないで部屋とした特徴的な建物もあります（写真4-4）。集落の周りはずかつてミカン栽培や茶栽培の生業の場でした。街道沿いに連なる石垣と建物が面として連続し、川や畑、山林などの景観と調和して、独自の歴史的なおもむきを形成しています。

高草山山地の支脈の東は、東海の親知らずといわれる大崩海岸で駿河湾に接します。大崩海岸の南端には、虚空蔵山が海へ突出しています。虚空蔵山は別名「当目（遠目）山」とも呼ばれ、陸からも海からも遠く望むことができる目印であり、古くは山自体が御神体として崇められ、多くの地誌に記載されています。大崩海岸とともに景勝地にも数えられています。

高草山は貴重な天然記念物の宝庫としても知られ、コシノコバイモやエイザンスミレなど珍しい植生が見られます。現在絶滅危惧種に指定されているキスミレは草刈り場に育つ山野草で、人間の生産活動とともに残ってきた希少種です。



写真 4-3 花沢地区のまちなみ



写真 4-4 花沢地区の街道の景観



写真 4-5 キスミレ



## (2) 瀬戸川流域を中心とした歴史文化の特徴

### －海運の基地から東洋一の港へ－

焼津は漁業の基地としてだけでなく、海運の要所として古くから栄えました。中世には古文書に残る小河湊が築かれ、大型の商船が出入りしていました。小河湊は明応の地震により海に沈んだとされ、その後、江戸時代には焼津湊、和田湊ができ、大井川筋からの木材の集積港としての機能も持ちあわせ、沿岸部を中心に焼津は大きく発展していきました。江戸時代にはカツオ漁が盛行し、明治時代に焼津水産翁を中心として近代漁船が整えられると、焼津漁業は一大飛躍を遂げ、鰹節などの水産加工業も刺激され、東海道線の開通といった物流網の整備も後押しして、漁業のまちとして全国的に知られるようになります。



写真 4-6 東洋一とうたわれた焼津漁港（昭和 29 年）

戦後には待望だった大型船が着岸できる港の築港が進み、焼津漁港は「東洋一の港」とうたわれるなど、焼津漁業のブランドが確立しました。往年の漁村の歴史的景観が残る浜通りは焼津漁業の発祥地といわれ、発展の歴史が刻まれています。

### －漁業のまちが生んだ魚食、衣類、言語－

漁業のまちとして発展してきた焼津では、海の幸や漁業にまつわる独特の衣食住の文化が形作られました。徳川家康の八丁櫓伝説とも関連して語られるカツオ漁は、古くから焼津漁業の中核を担い、戦後は、遠洋漁業の発展と焼津漁港の築港などにより、マグロの水揚量も急激に増大しました。鰹節やなまり節のほか、サバを主に使った「黒はんぺん」などの練り製品も漁業の発展に伴って焼津の特産品になりました。東京築地でもらってきた手拭いてぬぐを生地



写真 4-7 なまり節の加工

作ったのが始まりという「魚河岸シャツ」や、漁師が漁に着ていった「鰹縞シャツ」にも、焼津の歴史のおもむきを感じることができます。このほか、大漁旗の染織も港町で培われてきた特有の技術です。

また、浜通りなどでは地区内の人同士を屋号で呼び合ったり、「浜言葉」といわれる方言が使われたり、漁業のまちとして発展してきた歴史の中で生まれた文化が、今でも色濃く根付いています。

## (3) 旧大井川本流域・現大井川左岸域を中心とした歴史文化の特徴

### －大井川と豊穡の地への祈り－

焼津は漁業のまちとして知られますが、昔から半農半漁で栄えてきました。大井川は市域に豊穡な土壌と豊富で良質な湧水をもたらし、小川地区で見つまっている古墳時代の水田跡が示す



ように、有史以前から稲作が盛んに行われていたことがわかっています。寛和年間(985～987)から続くとされる藤守の田遊びは、田植えから稲刈りまでの所作を表現した民俗芸能で、当地での稲作の歴史を伝える文化財でもあります。江戸時代に入ると旧大井川本流域を中心に新田開発が活発となり、多くの水田が造られました。一方、大井川は3年に1度といわれる頻度で氾濫し、旧大井川本流域以南では治水対策として田畑を守る堤や輪中つつみが造られ、舟形屋敷や三角屋敷といわれる独特の形をした屋敷地も残ります。大井川への豊穰の祈りと畏怖の念は、市内に点在する大井神社や大井八幡宮、川除地蔵などにも表されています。



写真 4-8 藤守の田遊び

米どころでもあり良質な地下水が湧く当市では、江戸時代には酒造りが盛んになっていたようです。明治以降は現大井川左岸域を中心に「志太杜氏」といわれる酒造集団が知られていました。また、大正時代以降は豊富な地下水を利用して養鰻も盛んに行われており、内陸の漁業も育てられてきました。

#### (4) 市内全域に広がる歴史文化の特徴

##### —日本武尊伝承が息づくまち—

「焼津」の地名は日本武尊の野火の難を由来として語られます。焼津神社を中心として上陸地点と伝わる北の御旅所おたびしよ、御沓脱跡おくつぬぎのあと、仙人ヶ岳などの場所、日本坂峠のあきや野秋、飯淵はぶちといった地名など、様々な地域に日本武尊伝承が色濃く残ります。毎年8月13日の焼津神社大祭では、日本武尊とその妃である弟橘媛おとたちばなひめの乗る雄輿、雌輿が浜通り地区などを渡御します。今なお市民の信仰の対象であり、身近な存在ともいえる日本武尊の伝承は、焼津特有の歴史のひとつです。



写真 4-9 日本武尊を祀る焼津神社

##### —焼津を駆けた家康の足跡—

徳川家康は戦国期には武田との覇権争いで、また駿府に移った大御所時代には鷹狩りで、しばしば焼津を訪れたとされ、市内には多くの家康伝説が残ります。焼津市指定文化財の「徳川家康朱印状」「坂本貞次・駒井勝盛連書状」「徳川家康公床机据え跡」は家康関係の文化財です。未指定文化財には「徳川家康肖像画しょうぞうが」「徳川家下賜茶道具類」「徳川家康筆ござあな」「墨梅図」などの有形文化財、「旗掛石」、「御座穴」、



写真 4-10 宗高権現に伝わる徳川家康肖像画(部分)

「<sup>つみきりじぞう</sup>罪切地蔵」、「<sup>かじそうくろう</sup>鍛冶宗九郎馬つなぎの松」といった史跡、焼津漁業の発展とともに伝わる「八丁櫓」伝説、「池ヶ谷（池谷）」や「<sup>かまぶた</sup>釜蓋」などの苗字にも、家康伝説が関連付けられ、分布は市内全域に及んでいます。

徳川家関係としては、江戸幕府樹立の功労者といわれる井伊直孝に関する「若宮八幡宮棟札」、「井伊直孝産湯の井」、紀州徳川家の尊崇を受けた海蔵寺関係資料（「海蔵寺本堂」「海蔵寺の厨子」「海蔵寺の本尊厨子」）、焼津市に隣接する藤枝市にある田中城の城主本多家が信仰した大井神社本殿（保福島）、同じく田中城主の西尾氏が寄進した絵馬など、焼津市指定文化財だけでも徳川家に関する資料が多く、徳川家との強いつながりは当市の特徴の一つといえます。

### －富士山のある景色－

焼津市の平坦地のほとんどの場所からは富士山が望めます。大井川地区からは<sup>すその</sup>裾野近くまでの雄大な姿を見ることができます。海岸部では中世の歌人も感動した、駿河湾越しの美しい富士山が見えます。焼津には富士を祀る浅間神社が4社あり、昭和10年代までは、瀬戸川、朝比奈川流域で富士登拝に伴って、<sup>みそぎ</sup>禊の習俗が行われていました。富士参りを描いた絵馬が残るなど、富士山は身近な信仰の対象として古くから<sup>あが</sup>崇められてきました。



写真 4-11 富士山信仰を描いた絵馬（部分）

### －焼津を彩る祭りと信仰－

日本武尊伝承でも触れた焼津神社大祭（焼津地区）は東海の荒祭りとして知られ、「アンエットン」の独特のかけ声をひびかせ、神輿が浜通り地区などを練ります。一方で、<sup>さるたひこ</sup>猿田彦や<sup>いちっこ</sup>御神子、<sup>おんくさぎ</sup>御供捧などの厳かな一面も伴っており、動と静が結合した、焼津の夏を彩るもっとも特徴的な祭りの一つです。また、大井川の利右衛門地区には3年ごとに行われる<sup>よしながはちまんぐう</sup>吉永八幡宮大祭の大名行列と鹿島踊りがあります。大名行列は<sup>どうちゅうやっこ</sup>道中奴と呼ばれ、<sup>かわじりつしまはらまん</sup>吉田町川尻津島八幡神社の<sup>でやっこ</sup>出奴・<sup>すみよしかたおか</sup>住吉片岡神社の<sup>いりやっこ</sup>入奴と関係する一連の行事ともいわれる貴重な祭りです。同大井川の飯淵地区で行われる12年ごとの酉年に合わせた長徳寺不動尊の御開帳では、本尊の不動尊から延びるさらしの白布が、地区内に張り巡らされます。



写真 4-12 吉永八幡宮の道中奴（大鳥毛）

このほか、三ヶ名（豊田地区）の不動院の不動尊や与惣次（小川地区）の釈迦堂の釈迦像、荻野堂（大富地区）の馬頭観音などは、堂宇は小規模ながら地区で大切に祀られており、毎年祭りが催され、地区の人々をつないでいます。



市内にはさらに多くの祭りがあり、信仰の形があります。それらは各地区の人々の紐帯ともなっており、地域振興に大きな役割を担っています。

－受け継がれる技術（弓道具・鯉節・焼津笠）－

焼津には、弓道具製作技術が伝えられており、今川が守り、武田、徳川が侵攻するなど戦国大名が覇権を争った地勢と関連して語られます。食文化では、明治時代以降に全国に名を知られるようになった焼津の鯉節の製造方法を守る伝承会が技術を研鑽しています。また、焼津は漁業だけでなく農業も盛んで、「焼津笠」といわれる日よけの笠が作られ、技術が伝承されています。



写真 4-13 弓道具製作技術

コラム：『万葉集』に詠まれた焼津辺

奈良時代、春日葺首老は焼津を通った際、「焼津辺にわが行きしかば駿河なる阿倍あべの市路に逢いし子らはも」と詠みました。安倍あべの市での出会いを焼津で懐かしんだ歌とされます。安倍は日本坂峠の北にある現静岡市駿河区安倍で、日本坂峠を越えて焼津に降りる途中の街道が歌の舞台と推定されています。『万葉集』に詠まれたこの歌から、伝統的建造物群保存地区の花沢地区を通る日本坂峠越えの街道は「焼津辺の小径」と呼ばれています。

コラム：年号を変えた焼津のできごと

『続日本紀』には天平勝宝てんびょうしょうぼう9年（757）8月18日、益頭郡ましづぐんに住んでいた金刺舎人麻自かなさしのとねりまじという人物が、カイコの産んだ卵が自然に文字を作ったということで、めでたい文字を献上し、そのことがきっかけとなり、年号が「天平宝字てんびょうほうじ」と改められました。

コラム：小川地蔵こがわじぞう

市内東小川にある海蔵寺の御本尊は、「小川のお地蔵さん」と呼ばれ、古くから海上安全や水難除けのお地蔵さんとして、信仰を集めてきました。各地に祀られたお地蔵さんは、その多くが海蔵寺の御本尊と同じ、片足だけを組んだ半跏踏み下げ座像という特徴的な姿をしています。焼津市を発祥地とした信仰は、ほかに例がなく、貴重です。



写真 4-14 大島の川除地蔵 ▶